
真似してみよう夢十夜

中等遊民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真似してみよう夢十夜

【Nコード】

N9541V

【作者名】

中等遊民

【あらすじ】

夏目漱石の異色の短編集「夢十夜」。

敢えて大文豪に挑戦し、晒してみよう、十の夢。

オチなし。笑い無し。カタルシス無し。

整合性のないイカれた夢の世界こそリアルなのか、それともウンザリするほどつまないリアルこそ夢なのか……

はじめに

ストーリーとして最低限のオチもついていない、とりとめのない話をWebにあげるのは公害だという論を聞いた事がある。確かに、そのとおりなのかもしれない。一方で、事前に警告すればガミガミしなくていいじゃん、と脳みその反対側で思ってみたりもする。

文豪、夏目漱石の短編集に「夢十夜」という作品がある。十個の夢の記録集みたいなもので、きちんと物語の形をなしたもののから、一見すると全くオチのないような話まで、支離滅裂な様々な夢の状況が時に幻想的、時に怪奇的に記されている。でも、さすが大文豪の書く文章のせいか、私はこの「夢十夜」という作品を飽きずに楽しんで読むことが出来た。「へー、あのひげのおっさん、こんなこと考えていたんだあ」と明治期の東京・本郷界隈へ想いをはせる。

本題はここから。実は私は、周囲の人よりよく寝ていて夢を見るようだ。強く記憶に残っている夢が多いわけではないが、とにかく二日に一度は、起床時に夢を見た記憶の残滓が脳に巣食っている。夢で活動的に動きすぎ、朝起きるとひどく疲れてしまっていることなどしょっちゅうのこと。実は夢の中の活動的な自分が存在する世界こそ実在し、重く気だるい嫌気のさす日中の世界こそ夢なのだと真面目に葛藤した事もある。

そういうわけで、よせばいいのに文豪の真似をしてやってみた、夢晒し。私は中等遊民というHNでなるうで活動しているが、夏目漱石は「高等遊民」という階層の人間を主人公に置いている事が多い。一方、リアルな私の精神は完全に「遊民」のそれである。(食うために働きながら、労働を心の底から憎悪している)

実力や有様を考えれば下等遊民と自称したいところだが、一応、両親には最低限の高等教育は受けさせてもらったので、まあ自称中等が妥当かなあ、と。

そんな中等の腐れ遊民が、明治の文豪に挑戦するわけで、他人様から見れば片腹痛いことこの上ないだろうが、面の皮を厚くして、晒してみよう夢十夜。

第一夜 ツキノワグマ

幼い頃、こんな夢を見た。

深い山奥にある博物館へと私はやってきた。真新しく、小奇麗だが人気少ない、郷土資料館のように小さい博物館だ。幼い私は一人そのひなびた博物館へと入っていった。すると、薄暗いロビーに二人の同年代の男の子がいた。名前は忘れてしまったが顔だけは覚えている。当時同級生だった二人組みだ。

二人とも特に親しかったわけではなく、ほとんど話したこともない相手で、一人は太っており、もう一人は痩せていて、私より背が高かった。

当時、今よりはずっと社交的だった私は、屈託無く彼らに話かけ、薄暗い博物館内を共に展示物を見て回ることになった。多くの鳥や獣の剥製や、植物の標本がライトアップされて並んでいる。

そして私達は、直立したツキノワグマの剥製の前にやってきた。背丈は二メートル以上ありそうな、大きなツキノワグマだった。ガラス張りの展示ケースの向うで、そのクマは直立したまま腕の前に突き出し、牙を剥いて私達を見下ろしていた。胸元の白い三日月が黒い体色と強いコントラストとなって映えていた。

私達が隣の展示物に注意を移しときだった。突然、剥製であるはずのツキノワグマが首を振り、大きく咆哮した。そのクマは生きていた。背後で唸り声とガラスの割れる音が聞こえた時、恐怖に駆られた私達はすでに博物館の出口めがけて走り出していた。

私達三人は息を切らせながら展示室を駆け抜け、廊下の突き当たりにあるエレベーターへと駆け込んだ。昔から人一倍足が遅かった私はすぐに息切れして脱落した。一緒だった二人は、すでに突き当たりのエレベーターへたどり着き、コンソールボタンを叩いている。緩慢な動作でエレベーターのドアが開いてゆく。私はもう逃げ

切れないと思い、直進してエレベーターには向かわず、左へ曲がって展示ケース陰へと逃げ込んだ。仲間の二人はエレベーターへと駆け込み慌ててドアを閉めようとしていた。クマは大きく吼えると、直立したまま私の横を猛スピードでエレベーターへと突進した。クマが横を通り抜けたときの荒い息遣いは、まるで私の鼓膜に焼きついたように今でも覚えていいる。

悲鳴が聞こえた。クマはエレベーターのドアを押し開き、エレベーターの籠へと二人を追い詰めた。エレベーターのドアが再度閉まり出した。開く時と同じくらい、ひどく緩慢に……

すると、立つたままのクマがなぜか私の方を振り返った。クマがこちらを睨んで吼えた。両側からドアが閉じられてゆく。私は急いでエレベーターのドアへ駆け寄り、床に落ちていた大きな石つぶてでエレベーターのコンソールを叩き壊した。(なぜそこに都合よく石つぶてがあったのかは、私にも判らない……)

とにかく、コンソールを壊さなければ、ドアがまた開いてしまふと思ったのだ。コンソールのパネルが割れ、火花が噴出す。私を凝視するクマが、両側から閉じられるドアによって視界から消えた。中からゴトンゴトンという暴れる音が聞こえたが、それもすぐに静かになった。

私はベソをかきながら博物館のロビーへとたどり着き、明るい外へと逃げ出した。私は大人に助けを求めようと背後を振り返ったところ、夢は終わり目を覚ました。

大汗をかき、パジャマが体にはりついていた。

第一夜 ツキノワグマ（後書き）

夢というのはまことに手前勝手なもので、夢のなかでは平気で他人をたばかったり、見捨てたり、酷い時には殺したりします。小学生の頃からこんな救いようの無い、独善的な夢を見ている私の精神レベルもおのずと知れたものです。

今になって思うと、エレベーターの外のコンソールを壊しても中からのドアの開閉には影響ないでしょうね。当時、なんでこんな事を考えたのかというと、子供の頃に興奮して見ていた映画「スターウォーズ」で、よくシャッターやドアを閉じた後、反対側から開けられないように操作パネルをぶっ壊すシーンが複数でてきて、それが印象に残っていたからです。

ちなみにこの夢のせいか、私は今でもぬいぐるみ以外のクマって動物はかわいいとは思えません。

第二夜 蜂塚

二年前、こんな夢を見た。

空にどんよりと雲が被さった夕方、風を背に受けグイグイと自転車ペダルを踏む。いつもの見慣れた帰り道を、風を切って進んでいた。いつもの交差点で私は信号に引っかかり、ブレーキレバーを絞った。

長い信号待ち…… 自転車にまたがりながら、国道の往来の反対側をぼんやり見ていたら、いつのまにできたのか、まったく見慣れない構造物が目にとまった。赤土を塗り固めた奇怪な高い塔が、道路向かいの家屋の敷地に建っていた。敷地の石塀越しに高くそびえる泥の尖塔の外壁は不規則にでこぼこしていて、それはまるで巨大な蟻塚を連想させた。

もう少しで信号が青に切り替わろうとする時、その蟻塚の頂上がにわかに動き、土壁がわずかに崩れて下へと落ちた。

やっぱりなにかいる！

私は、気色の悪い現象に色を失い、信号が青に変わっても蟻塚を見据えたまま動けなかった。すると、少し崩れた塚の頂上から、黄色と黒の攻撃的な配色の、異様な生き物が這い出てきた。太くくの字に曲がった触覚。片方だけでソフトボールくらいありそうなギラつく複眼。脈の通った半透明の羽。そして、うねうねと動き、黒と黄色の縦縞に彩られた湾曲した腹……

姿形は決して見慣れない生き物ではない。テレビや図鑑ではよく目にした事のあるスズメバチだった。ただ、そのサイズは大型犬くらいある。遠くだが、一目でその巨大さが判った。そうするうちに塚の上部はさらに崩れ、八ちは次々に外へと這い出してくる。

鼓膜を逆撫でする重低音の振幅と共に、八ちたちは一斉に宙へ舞った。八ちは次々に沸いて出ては辺り一面を飛び回り、猛烈な羽音

が、一帯の大気を満たす。羽音以外の音はほとんど聞こえない。

きつと、あまりのことに驚いたのだろう。国道を走っていたトラックがコントロールを失って中央分離帯に乗り上げ、私の目の前で横転する。そこへ後続のワンボックスが突っ込み、金タライをひっくり返したような大音響が羽音に紛れて聞こえてきた。八手たちは、まるで獲物を見つけたかのように、事故車へ群がる。すでにあたりの通行人や車は恐慌をきたし、八手から逃れようと走り出した。クラクションや叫び声がかすかに聞こえたが、それも猛烈な羽音に遮られてしまった。道路の反対側を走っていたおじさんは、上空から八手に襲い掛かれて道路に押し倒されるや、頭をかじられはじめていた……

とても正視できないので目を逸らし、走り始めたが、ふと去年の秋のニュース番組を思い出した。確か、八手は自分より下方の視界があまりないので、もし襲われた場合、なるべく身を低くするようにとアドバイスしていた。それに、急な動作は八手の注意を引いて危険だ。夢の中では私は冴えているのだ。

私は四つん這いになっていそいそと、地獄絵図となった交差点から離れはじめた。頭上ストレスを巨大な八手がかすめる。アスファルト路面の鋭いでこぼこが掌と膝頭に突き刺さり、非常に痛む。夢の中で痛みを感じないというのは私は嘘だと思う。少なくとも経験したことのある痛みは、かなりリアルにフィードバックされることがある。わたしは掌と膝頭に走る痛みを耐えながらひたすら這ってゆく。もう耳には猛烈な羽音しか聞こえない……

逃げなきゃ、逃げなきゃ、はやく逃げなきゃ……

そうやって這っているうちに目を覚ました。思わず両の掌を目の前に掲げてみる。傷などあるうちはずも無いのだが、四肢にアスファルトが刺さる痛みと、脳にへばりつくような猛烈な羽音の残滓だけは、布団に起き上がった後でもはっきりと焼きついているようだった。

第二夜 蜂塚（後書き）

— 所謂いえば中学生だったころ、メガネはずして髪をやや短くすればシンジ君に似てるかもと言われた事があります。でも残念な事に、私のまわりには綾波もミサトさんもいませんでした。（アス力はどうでもいい……）

もっとも、私はシンジ君じゃないので「逃げちゃ駄目だ」じゃありません。

この夢は、人生いつも逃げの姿勢ばかりな自分に対する警告だったのでしょうか？ ただ、巨大な蜂に襲われつつあるこの状況で、本当に勇気のある人だった一体どうするのだろうか？

たたかう？ じゅもん？ あやまってゆるしてもらおう？ クソゲー的な選択肢しか思いつきませんね。

二夜続けて動物災害な夢になってしまいました、次回はちょっと毛色のかわった夢の話になるでしょう。

それにしても夢で害獣にやられる事がとても多いです。

第三夜 深夜のドライブ

一年前、こんな夢を見た。

アクセルをわずかに踏み込むと、自慢の直列六気筒エンジンはさらにガソリンと空気を吸い込み、腹の中ででそれに火をつける。すると私の愛車は一瞬、駆動輪である後輪側へ傾き、さらに加速を強めてゆく。

時刻は真夜中、空には星も見えそうだが。周囲に家はなく、ただ舗装道路の両側一面、どこまでも収穫前の田地が広がっている。前方にも後方にも、目障りな他の車はいない。対向車も無いので、市街地では普段使わない前照灯のハイビームに加え、フォグランプまで点けて平野を真ん中を突き進む。道路沿いに一定間隔に置かれた街路灯だけが私の行く先を示してくれている。暗闇に浮かび上がるその一筋の光点を目で追ってゆくと、まるで自分が航空機のパイロットにでもなったような感覚になってくる。夜の滑走路に機体を導くガイドランプのように、電柱の明かりは私と愛車を地の果てへと案内しているようだった。

車内には絞った音量で、ジャズのピアノ曲が流れ、助手席では友人がシートにもたれてうたた寝をはじめていた。快適なドライブだった。普段はこんなにとばせない。普段はこんなにリラックスして運転を楽しめない。最高のドライブ日和の夜だ。

田地の広がる前方に、ゆらめく街の灯が小さく見えてきた。街路燈は道路と一緒に愛車をその街へと導いている。

寝ていた友人が目を覚ました。彼は周囲を見回しあくびをする。

「悪い、つい寝ちゃったよ」

「うん」

私はハンドルを握って前を向いたまま相槌を打った。

「ちよっとお腹すかない？」

私は夕飯を食べていない事を思い出した。急に空腹に襲われる。もう少しこの快適なクルーズを楽しんでいた気持ちもあったが、そろそろ休憩が必要かもしれない。私は前を向いたままうなずいた。

「もう少し進むと市街地だ。あそこで何か食べよう」

前方には、暗黒の田畑の海に島のように浮ぶ街の灯が先程よりもはつきりと見えてきた。そして街の中心には、一際高い細身の高層ビルがまるで灯台のように建っていた。私はそのタワーをランドマークにして車を進めてゆく。道路脇の街灯もその街を目指して光の筋を作っていた。緩やかなカーブを曲がるたび、ランドマークとなったビルの灯りはフロントガラスの右端へ寄ったり左端へ寄ったりしたが、道路は間違はなくその街へと続いていた。

緩やかなカーブを繰り返しながらしばらく進む。さらに進む。ハンドルを手繰りながら、なおも進む。BGMのピアノ曲が終わり、続いてサックスの曲が流れ始めた。

私は妙な違和感を感じ始めた。気のせいだろうか……

「思ったより遠いね……あのビル、相当大きいんだね」

私がそう言うと、友人もうなずいた。

「ていうか、さっきからほとんど近づいている感じがしないな」

「え、やっぱりそう思う？」

私は驚いて、運転中だというのに横の友人へ顔を向けてうなずいた。最初見た時よりはずっとはつきりとその直立したビルの姿が見えているが、その後一向に近づいている気がしないのだ。街の灯りも同様で、景色に散りばめられた無数の光点が少しも大きくならない。

周囲は暗黒だ。一瞬私は、自分の車が停車しているのではないのかという馬鹿げた想像をした。だが、エンジンは快調に唸り、スピードメーターの針は時速七十五キロを示している。それに、道路左脇の街灯と道路のセンターラインは、さっきから幾本も前方から後方へと流れてゆく。愛車は確かに疾走していた。私は妙な居心地の悪さを感じはじめた。シートに押し付けていた背中やハンドルを握る手が少し汗ばんできた。アクセルを踏み込みさらに加速を強める。

スピードに合わせるように、街灯もセンターラインも勢いを増して後ろへ流れてゆく。

演奏時間十分弱のサックスの曲が終わり、車内にはエンジン音とタイヤの回る音だけが聞こえてくる。時速八十キロ。これ以上の加速は危険だ。

「ねえ、やつぱりおかしいよ。全然近づいてないよ」

私は狼狽気味に言った。友人も無言でうなずくだけだ。まるで、愛車と同じスピードであるの街が遠くへ逃げていくようだった。私は薄気味悪く思い、適当なところで一度停車しようと思った。

「仕方ない、ここらで一休みしよう」

私がそう言った時だった。後方から八口ゲンライトの青白いハイビームが愛車に浴びせられた。私は慌てた。後続車なんていなかったはずだ。後ろから光に照らされているのはわかったので、反射的にルームミラーへ目をやるが、不思議な事に後続車もハイビームの光源もミラーに映っていない。思わず肩越しに背後を振り返ると、何故かミラーに映っていないかった大型トラックが猛スピードで加速しながら愛車後部へと突っ込んできた。悲鳴をあげる間もなくガリガリッという空き缶の潰れるような音がして、猛烈な衝撃とともにコントロールを失った私達の車は八十キロ以上の速度で、真っ暗な水田へと突っ込み、天地逆さまに転覆した。

悲鳴のようにひいと息を吸い込みながら、一瞬で目が覚めた。まだ明け方だったが、夢の中でアクセルを踏み込んでいた右足がこむらがえりを起こし、苦痛の余り現実の世界で叫び声を上げた。

第三夜 深夜のドライブ（後書き）

下手の横好きとは全く私の為にあるような言葉で、私自身は結構な自動車好きなんです（決して詳しいわけではないです）、そのくせに運転が下手クソなんで、せつかくドライブに出かけても、駐車場で隣の車にぶつけやしないだろうか？ 無謀運転の車がこっちへ突っ込んでこないだろうか？とドキドキの連続です。時々、田舎道で前後に他車や人がいなくなるとホッとしたり。小心者なんて無茶はやらず、免許はキンキラですが、あればつかりは運転が上手い下手とは関係ないような……

きつとそんないつもの不安症が形を変えて出てきたのが今回のような夢なのかもしれません。決して辿り付けない街、砂漠の中に現れる屋気楼のオアシスみたいな感じで、嫌な渴望感をもたらす後味の悪い夢でした。

そういえば、別の運転がらみの夢では「ドライブ中にパトカーに当て逃げされる」っていう、細かく再現するといろいろと問題がありそうな夢を見たことがあります……

第四夜 オン・ザ・ラテソル

四年程前、こんな夢を見た……

夜になると虫達が鳴きだす。季節によつてはそれが昼間よりうるさい事もあるが、今の時期は季節の変わり目で、気候も最も過ごしやすく、虫達の声もそれなりに穏やかな季節だった。

トタンでできた納屋から、粗末な背もたれ付きの木のイスを引っ張つてきた。納屋のそばにある、地面に長い鉄パイプを刺し、その上へコードを伸ばして電灯を据えただけの粗末な野外灯の真下へイスを置いた。

イスの横に黒いショットガンを立てかけ、私はそのイスに腰を下ろした。灯りに照らされたラテライト質の真つ赤な地面に、大きな黒い影がいくつかが不規則な影をつくつて踊っている。私は頭上の野外灯を見上げた。真上ある野外灯の白熱電球に大きな蛾や羽虫が群がっていた。

家屋の方から家族が何やら文句を言っている。

うんうん、判つてる。今夜はもう少し起きてないと。はいはい、もう寝てていいよ。大丈夫、虫除けは塗つたから。

家族は戸口へ引つ込み、家の電気が消えた。私は自分の腕に鼻を押し付けてみた。デイドを含んだ薬剤の臭いが鼻を突く。あと二時間ほどしたら、もう一度塗り直したほうがいいかもしれない。特に夜間、ここではマラリア対策が欠かせない。

風が吹き、私の眼前一面に植わつたトオモロコシの葉がカサカサカサと音を立てる。私の背丈よりも大きく育ち、トウモロコシは収穫目前だ。今週中には収穫をはじめようと思った。

まだまだ夜は長い。私は足を組み、淡い緑の布で装丁された平凡社出版の本を開いた。書齋から持ってきたトマス・エドワード・ロ

レンス著「知恵の七柱」だ。

今日はどこまで読めるだろう？

私はしおりを挟んだページを開く。それは著者のロレンス達一行がちょうどオスマン・トルコ占領下のアカバ港攻略に差し掛かったところだった。想像は時間も場所も、はるか遠くへと飛んでゆく。

どれくらい時間が経っただろうか。畑のずっと奥のほうで葉がカサカサカサと鳴った。私は顔を上げた。奥の方で、稲穂のようなトウモロコシの雄花がかすかに揺れたような気がした。しおりを挟んで本を閉じる。私は本を置き、シヨットガンを掴んでゆつくりと立ち上がった。

やっぱり来たか……今夜はヒヒかな？ それとも人間だろうか？

幸い、私も家族も今すぐに飢える心配はなかったが、残念ながら他人に作物をただで持っていかれて困らぬほど収穫があるわけではない。私はシヨットガンのフォアグリップを引いて弾を装填するとトウモロコシに当たらぬよう、わずかに上を狙って発砲した。空に破裂音が響く。フォアグリップを引いて更にもう一発撃つ。

銃声の余韻が消え、再び虫の歌声だけが響き始めた。広いトオモロコシ畑にもう気配は無い。どうやら逃げていったようだ。昨日の夜もそうだった。

私は鼻から息を一吐きした。赤土の上に落ちたまだ温かいシヨットシエルの撃ガラを拾って、そばにあるクスカゴに放り込み、私は再びイスに腰掛けた。おそらく、もう今夜はやって来ないだろう。そんな気がした。

私は再び本を開き、第一次大戦下のはるか中東の砂漠へと思いを馳せる。夜は静かに更けてゆく。

第四夜 オン・ザ・ラテソル（後書き）

という、オチらしいオチのない夢でした。目覚めは非常に良かった記憶があります。この夢、個人的には非常に印象深い夢で、私の中ではいい夢として認識されています。

この夢には、夢の大前提となる『空気』というか『舞台設定』というか、その夢の中では明示こそされていないが、認識しているお約束みたいなものがあって、その上でこの夢を見るとなかなか面白い。

かいつまんでご説明すると、土壌や風土の関係から、舞台は恐らく日本でないことはすぐ判りました。遠い国のどこかです。私自身は、この風景は多分あの辺りの国だなと、大体わかっているのですが……

私は何らかの理由で、日本から家族を連れてかの土地で食う為に農業の真似事をはじめたようで、数年かかってなんとか飢えない程度になったようです。日本を出た理由は、あまり良い理由ではなかったような気がします。

夢の空気から伝わってくる限り、世界情勢は今以上に混迷しているようです。たまにワールドニュースで日本のことが伝えられると憂鬱になってテレビやラジオの電源切ってしまうという感じです。あまり良いニュースが入ってこないのでしょうか。

ただ、今いるこの赤い土地も、日本の現実の感性で考えると、決して住みよい土地ではないようです。自分の糧を自ら散弾銃で守らなければならぬという、かなり剣呑な環境です。経済的にも社会的にもとても豊かとは言えない土地です。

何故わざわざ、そんなところへ家族総出で移住しなければならなかったのか、理由は私自身にも判りません。ただ、夢の中の私の精神は、なぜかとても安らかでした。あらゆる俗事から解放され、誰に依存する事もなく、逆に依存される事もなく、自身の判断と能

力だけが自身の生存を担保するという、苛酷だけれども非常に自由な心持でした。

虫の声、白熱球の色、トオモロコシの葉の揺れる音…… いまでも鮮やかに脳裏に浮ぶ、そんな夢でした。

P・S・ 家族にこの夢のことを話して聞かせたところ「あなたの、ケチなところと臆病なところがよくあらわれている」とのこと、アイタタタ……
エラそうに書いても、結局これが真実かもしれません。

第五夜 マイクロシーベルト・パー・アワー

今年の三月下旬、こんな夢を見た……

水で洗い流しやすいよう、普段使うズボンの上からツルツルした化繊のトレーニングパンツをはき、その上から雨合羽を羽織る。首元までしっかりとボタンを止めてから、合羽と首筋の隙間を少しでも埋める為、首にはタオルをきつく巻く。そして、最後に野球帽子を被った。

口元には、二重にした医療用マスクのつけ、マスクと口の間にならしたハンカチを幾重かに折りたたんだものを挟む。冷たくてとても不快だがしかたがない。玄関で身支度を整え、一度深呼吸する。

これじゃ足りない。とても足りない……

私は意を決して玄関から家の外へと出た。外気になるべく入らぬよう素早くドアを閉めると、小型の放射線測定器のスイッチを入れた。

ジ、ジ、ジ、ジ、ジ、ジ……

測定器から耳障りなクリック音が鳴り出した。

不活性ガスが充填されたガイガーミューラー計数管を使用する、あの種の古い放射線測定器は「ジジジ……」もしくは「カリカリカリ……」というクリック音の間隔や、その強さで線量の強弱を表す。私の手にした線量計も、いきなり耳障りな作動音を発し始めた。

覚悟はしていたが、それでも顔から血の気が引いてゆく。だからといって、事実から目を背けられないので、私は線量計を外の地面へと近づけた。

ジ、ジジ、ジジジジ、ジジジジジジジ……

測定器が喚き散らす。吐き気を催すようなクリック音が絶え間なく鳴り続ける。一秒でも長くここにいるべきではないのだろう。私は表示された数値を見るため、線量計の液晶画面を覗き込んだ。

どうしたことが、線量計の表示画面には何も数値が表示されない。スイッチが入っていないわけではない。その証拠に電離放射線を捉えた事を示す音は強くなってゆく一方だ。私は目を凝らして、何度も液晶画面に目を凝らす。瞬きして目を凝らす。

一体、この放射線量はいくつなのだろう。早くそれを把握しなければ。こうしている間にも微細な放射線が私の全身の細胞を焼いてゆく。液晶画面には何も映らない。でも、線量計は鳴り止まない。

ジジジジジジジジジジ……

場面は唐突に食卓へと転換した。食欲はない。湯気の立つ味噌汁を口に含むが、なぜかとても苦い。ご飯を口にするも、重金属のような味がする。私は箸を置き、ため息をついた。

ジ、ジ、ジ、ジ、ジ……

テーブルに置いてあった線量計が勝手に鳴り出した。わたしはぞつとしながらも、それを手にとる。相変わらず、液晶画面に数値は表示されない。

ジジジ、ジジジ、ジジジ……

またも、音がやかましくなってきた。私は唐突に悪寒を感じ、自分の腹部に線量計を押し当てた。

ジジジジジジジジジジジジ……

第五夜 マイクロシーベルト・パー・アワー（後書き）

特に補足説明の必要もない夢ですね。見たままのストレートな夢でした。

『とある被曝のノイローゼ』とかいう題で小説書いたら人気出るかな？ …… ええ、大丈夫、もちろん書きません。というか、そんなの書けません……

えーと、現実世界の恐怖や不安というものは、たやすく夢の世界にまで侵入してくるもので、今回の夢もそのよい例だと思います。

今年の三月十二日、福島第一原発一号機の屋根が吹き飛んだ瞬間、私にとってこれまでで最大で、初めての「有事」が始まりました。

八方手を尽くしても線量計は手に入らず、家がどの程度汚染され、自分がどれほど被曝したのか全く判らず、とにかく状況を把握しなければと恐怖と不安の只中あつた時に見た夢です。どうやら夢の世界は自分の想像力を超えることはできないようで、数値が見えないという、現実世界のもどかしさがストレートに夢にまで再現される結果となりました。

元々、幼い頃から「放射能」「放射線」の恐ろしさというものは別格だと教わって育ってきた為（小さい頃にチェルノブイリが吹き飛んだ）、私自身は人より数倍、放射能には神経質な人間になりました。実際これまで、ドキュメンタリーや映画で放射線測定シーンが出るたび、「あのような環境や製品は自分と関係があつてはいけない世界のもの」という忌避感を抱きながら見ていました。それがあろうことか……

最近のガイガーカウンターは放射線を検知すると、クリック音ではなく電子音のブザーで鳴るものが多く、クリック音を発する製品はあまり見ません。夢の中で放射線の音が、テレビや映画で聞いたそのままの、「近くで決して聞いてはいけない音」であるクリック音だったところが、私の恐怖と単純さをよくあらわしているような

気がします。

ある学者が、放射能災害は人の肉体だけでなく、その恐怖や不安が精神をも蝕むから、心配のし過ぎにも注意が必要とのコメントをしていました。物理的な被曝への注意はあたりまえですが、こんな夢を見ている私は精神面でも注意した方がよいなと思いましたがね。

事故から四カ月後、線量計を入手でき、ある程度信頼できる数値も判り、幸運なことに即引越さなければならぬ状況ではないと判りました。

ただ、これまで経験した事がないくらいの外・内被曝をしたことは確かなので、最近ガン保険の値段を調べ始めたのは真面目なお話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9541v/>

真似してみよう夢十夜

2011年10月24日20時11分発行